

=大地に根をはり

明日に向って一步をふみだす=

愛知保育問題研究会仙台の旅に参加して

梅村美千代（愛知 あいかわ保育園）



11月23日（金）～25日（日）の3日間、愛知保間研の27名のなかまと仙台の被災地を訪問しました。

昨年の3.11から1年8ヶ月を過ぎた今、いろいろな思いをもって一人一人が参加されたと思います。

私自身も今の状況をしっかり自分の目で見、そこから自分自身に、自分たちに出来ることを感じ、持ち帰りたいという思いで参加をしました。23日、仙台に降り立ち、仙台保間研の皆さんの待つ交流会場に向う駅の周りは震災を受けたとは思えないほどのビル街が目に入ってきました。若者が行きかうファッションビルが立ち並び、綺麗にクリスマスの飾りが施された建物の中は大勢の買い物客でにぎわっていました。月日が流れ復興がされたんだと思う反面、この状況にもどすまでにどれだけ大変だったかと思いながら足早に会場へと向いました。

会場では仙台保間研の丹野さん、小幡さん、宮崎さん、三浦さんから震災当時の状況、そして現状についてお話を聴かせて頂きました。

震災時、言葉では言い表せない恐怖に向き合った当時のことが話されました。「子どもの命を守る」ためには誰かに聞いて行動をするのではなく、職員一人ひとりが判断をして責任を持って行動をする。このことは「日頃の訓練を徹底して行っていたことで、子どもたちすべてを安全に逃がすことが出来た」と話されました。三浦さんから、子どもたちの描いたチューリップの絵とそこに添えられたことばの紹介がありました。絵の横に描き添えられた、ちいさな子どもたちの声、父に、母に、おじいちゃんに、おばあちゃんに、「ありがとう、頑張ってね」と投げかけている言葉に、自分の置かれている状況を子どもなりに感じとり一生懸命に頑張っている姿に胸が痛く熱くなりました。また職員集団の連携で、子どもたちの命を守りぬいたお話など聞く中で、自分の園での避難訓練のあり方、備蓄品の数、中身の点検、置き場所など危機管理について改めて身に迫るものを感じ、学び直すことができました。

そして最後に翌日の予定が鈴木牧夫さんから話され、「被災地」に足を踏み入れる心の準備をしました。

2日目は、常磐自動車道を走り、海側の山元町を訪問しました。さえぎるものが無かった山元町は、海からの津波の氾濫で大きな被害を受けたとのこと。お訪れた日も、大きなトラックが行きかい、塩砂を削り平らにする作業が続いていました。整備が進んでいるといっても瓦礫の山や、主のいない家が寂しげに点々と残っていました。甚大な被害を受け、8人の子どもの命が奪われたふじ幼稚園、3人の子どもを亡くした山元町の保育園を尋ねた時は、子どもたちが使っていた物が保育室の中に片付けられていました。子どもたちの元気な声が響き渡っていたらう建物がとても悲しげに佇んでいるように見え、同時に子どもたちは想像もつかない怖い思いをしたかと思うと胸が苦しくなりました。



さいごに鈴木先生に荒浜保育所のあった場所まで案内をして頂きました。ここに来る迄に先生からは、保育園の北側に位置する中学校に避難をした時の状況、屋上からヘリコプターでお年寄りからそして子どもたちが無事に避難をしたお話を聴いていました。荒浜保育園の場所に今は建物は無く、更地になっていました。「この場所から海が見えて、子どもたちが散歩に行くのを事務所から見ていたんだよ」と当時を思い出すかのように南側に見える海の方を見て話される鈴木由美子所長さん。保育園のすぐそばに実家があったことを話してくださった先生が、どんな思いで今この地に立って見えるのだろうかと思うと涙が出そうになってしまいました。この日はつめたい風が吹いていました。空を見上げると綺麗な青空。少し離れた海はとても穏やかな白波を立てていました。しかし現実には残酷です。目の前に飛び込んできた景色はあの時の津波で無残にも壊された堤防。そして思いもよらぬ力で押し流されたコンクリートの残骸が道路の真ん中に鎮座していました。1年8ヶ月過ぎようとしている今

も生々しい傷がいたるところにあるのが現状です。でもそんなコンクリートの塊が押し寄せてきた横には、綺麗な黄色の花がしっかり大地に根を張り咲きはじめていました。これからの寒さにしっかり立ち向かうかのように花と花がまるで手をつないでいるかのように咲いているのが一つの救いでした。

昨年の震災以降、自分が出来ること、自分たちに出来ることは何かとみんなで考え行動に移したのが、保育園の親御さんにカンパを呼びかけ物資を集めて送ることでした。呼びかけに「ひとごとじゃない」、「今必要なものをあつめよう」とすぐにたくさんの支援物資やカンパが集まりました。

そんな中、保育園で卒園式を迎えました。その時園長として私は、親御さんに「子どもたちが元気に、なかまと共に育った自分の保育園で無事に卒園式が出来ることに感謝し外に出て思いっきり遊ぶこともできない不自由な思いをしている子どもたちがいる震災のことを忘れないでほしい。そして、これからもできることを続けていこう」と話しをさせてもらいました。そしてたくましく立派に育った子どもたちを親御さんと職員皆で送り出すことができることの喜びをみんなで実感をしたのが一昨年前のことです。今回この旅に参加し、一人では知りえることが出来ない被災地の保育園や幼稚園の状況を目の当たりにし、この事実をしっかり周りの仲間や関係者に伝え被災地の復興のため、息の長い支援を続けていくことの必要性を強く感じました。

最後に、いまだに癒されてはいない状況のなかで、お話をさせていただきました仙台保問研の皆さん、吉田保育所の鈴木由美子先生、お世話をして頂きました鈴木牧夫先生、ありがとうございました。

